

印西大師 番外 結縁寺・へたの堂 ※※

1 名称 (No.157/277)〔手引鏡：辺田の堂〕〔資料館：へたの堂〕

2 場所 印西市結縁寺535-1 結縁寺青年館
結縁寺の東隣

GPS座標 35.79015804913128, 140.13571793900107

3 由緒

4 御堂 結縁寺青年館のあるあたりにへたの堂があり、ここに大師堂があったのではないか。現在は大師堂はないが、結縁寺の大師堂にある2体の御大師様のうちのいずれかが、へたの堂にあった御大師様ではなからうか。(推測)

5 境内 結縁寺青年館の前は消防団倉庫、東は熊野神社と入定塚、西は結縁寺

6 写真 (2019.08、2023.10撮影)



結縁寺とハス



青年館横の石造物



結縁寺青年館と熊野神社

7 情報

(1) へたの堂

手引鏡によると、へたの堂(辺田ノ堂)は、頼政堂から3丁13間(351m)、結縁寺から半丁10間(73m)の位置である。道路位置は、現在(下の左図)と明治初期の迅速測図(下の右図)で大きな違いはない。



頼政堂から結縁寺へ向かう道程は、頼政堂から北へ向かうルート(赤色の点線)と西に向かうルート(青色の点線)が想定される。Googleマップで現在の道程を測ると前者が約500m、後者が約600mとなる。手引鏡の距離は351+73=424mしかない。したがって、北へ向かうルート

(赤色の点線)が合理的である。結縁寺から73mとするとピンク色の○の点線内にへたの堂があったのではないかと推測できる。

(2) へた(辺田)

へた(辺田)とは、地形や場所において境や端を意味している。印西には辺田の付く地名が多く、辺田(松崎)、辺田前(中根・師戸・瀬戸)、辺田谷(萩原)、辺田口(白幡)、下ノ辺田(大森)など、いずれも台地の端や、田んぼとの境あたりである。辺田の堂も結縁寺の里山から下った田んぼとの境にあったお堂であろう。

(3) 結縁寺にある御大師様のうち1体は青年館にあった

現地に行っても御堂らしきものがないので農作業中の方にへたの堂についてお聞きしたところ、○○のじいさんが昔のことをよく知っているから聞いてみるといいと紹介されました。○○さん宅の前に、偶然ご本人がおられたのでお話を聞くことができました。現在は結縁寺の大師堂に2体の御大師様があるが、そのうち1体は結縁寺青年館にあったものを移したものだ、とのことでした。青年館は結縁寺の東隣りにあり、結縁寺から73mという距離関係に合致します。そこに「へたの堂」という名の御堂があったかどうかは記憶がないとのことでしたが、(へたの堂にあったかもしれない)御大師様(石像)がしばらく青年館に保管されていて、それが結縁寺の大師堂に移されたことが確認できた。帰り際に「珍しいものをあげるから待ってな」と言われ、何かと思ったら干柿をいただきました。20年ぶりに食べられました。珍しいものをありがとうございました。(2023.10現地調査)



(4) 青年館のところに阿弥陀堂があった

後日、10月に現地調査でお聞きしたようなことが書いてある資料がありました。

「古老によると、現在青年館がある場所には太平洋戦争後しばらくは阿弥陀堂が残されていたといえます。

大正時代に千葉縣により刊行された『印旛郡誌』には、(阿弥陀堂について)結縁寺村字北ノ内にあり真言宗にして阿弥陀如来を本尊とす由緒不詳堂宇間口四間奥行四間境内二百六十四坪あり住職は大野快寶にして信徒百六十八人を有し、と記載されています。

阿弥陀堂は茅葺屋根で傍らには鐘楼堂もあり、現在は境内に移された印西大師の大師堂や、さまざまな石塔なども周囲に配置されていました。しかし、日本の経済が成長期に入ると千葉県の施策もあって、北総地域では青年館の建設ブームが起きます。こうした時代の流れの中、結縁寺地区でも老朽化した阿弥陀堂を取り壊し青年館が建設されたのです。傷みが目立つようになった阿弥陀堂の維持管理にかかる費用負担が檀家を圧迫するようになっていたことも、取り壊しの一因になりました。」(令和2年9月28日初版発行・結縁寺里山保存会編「結縁寺 第1集」より)

(5) 弥陀堂と観音堂

「弥陀堂」は、かつて北ノ内にあり真言宗で結縁寺に所属、阿弥陀如来を本尊とする、昭和30年頃台風のため倒壊、また、「観音堂」は、かつて西ノ内412にあり真言宗で結縁寺に所属し馬頭観音を本尊とする、大正7・8年頃台風のため倒壊となりました。(平成6年寺院堂庵明細表)

なお、「北ノ内」は結縁寺から北側(ほりえ歯科方面へ向かう)あたり一帯を言いますが、青年館のあるところも北ノ内かもしれません。「西ノ内」は結縁寺の南側(名馬塚方面へ向かう)あたりです。

(6) 利根川図誌の結縁寺

江戸時代末期に書かれた利根川図誌の絵図には、現在の結縁寺の本堂があるあたりに「結縁寺」とあり、現在の青年館のあたりに「本堂」や「鐘楼堂」が描かれています。結縁寺とは別の場所に本堂があるというのは不思議ですが、結縁寺里山保存会編「結縁寺 第1集」に「阿弥陀堂は茅葺屋根で傍らには鐘楼堂もあり、現在は境内に移された印西大師の大師堂や、さまざまな石塔なども周囲に配置されていました。」とあることから、「本堂」や「鐘楼堂」というのは、阿弥陀堂の本堂や鐘楼堂のことのようです。結縁寺は現在と同じ場所にあるので、もしかしたら「阿弥陀堂」が手引鏡でいう「へたの堂」のことかもしれません。里山の端にあるのでそう呼ばれたのでしょうか。



干柿をいただいた地元の方によると、昔はこのあたりまで印旛沼の水がきたようだとの話がありました。湧水が得られ、水害の危険もない「へた」がお堂を建てるには最も良い場所だったのかもしれない。

(7) 阿弥陀堂

(結縁寺の) 近くにあった茅葺の阿弥陀堂は雨漏りが甚だしく、売りに出されていたが売れぬまま朽ちて、屋根も崩れ落ちてしまったという。庫裏も文明六年建造の立派なものであったが、これも今はない。(酒井秀郎「泉倉寺・結縁寺・光堂－房総寺でらへの道(昭和53年刊)より」平成8年3月発行「印西町の歴史」所収)